

2011.11.18

桑名市議会議員

愛敬

東日本大震災に学ぶこれからの地域防災

～求められる命を守る防災への転換～



□想定を超える災害にどうそなえるか

～2011年東日本大震災を事例に～

- ・三陸沖～宮城沖～福島沖～茨城沖の
500km×200kmにわたる震源域・
M9.0
- ・三重県の津波浸水想定：M8.7→M9.0
0.3増しただけで浸水域は大幅に増
加
- ・2つの意味での想定・・・ありえること

としての想定、防災上の想定

- ・今回の大地震、何が問題だったのか？・・・**「想定にとらわれたすぎた防災」**

「あの防潮堤・防波堤があればもう大丈夫」「ハザードマップの浸水想定区域外だから大丈夫」

津波防災の原点とも言えるものは2004年のインド洋津波です。当時、釜石では、非難勧告を出しても住民は逃げないという状態が常態化していたこともあり、インド洋津波の惨事と重ね合わせ、いずれたいへんなことになるという思いを抱き、防災に取り組んできた。

防災というのは、無尽蔵に大きな災害すべてを想定して防ぎきる性質のものではありません。想定を設定し、ある一定のところまで守るぞ、という発想でやっていくものだと考える。

□想定外を生き抜く力～大津波災害から生き抜いた釜石市の子どもたちに学ぶ～

- ・釜石市の小学生 1,927人、中学生 999人のうち、津波襲来時に学校の管理下にあった児童・生徒については、全員無事が確認された（ただし、津波襲来時において学校管理下でなかった児童・生徒のうち、5名が津波の犠牲となった）
- ・釜石の津波防災教育で伝えてきたこと

大いなる自然の営みに畏敬の念を持ち、行政に委ねることなく、自らの命を守ることに主体的たれ→大人がまず逃げる事を教える

この信念に基づく「避難3原則」：想定にとられるな、最善を尽くせ、率先避難者たれ

「想定にとられるな」

私はハザードマップの専門家ですが、そのハザードマップを信じるな、と言っています。

子どもたちにハザードマップを配布すると、自宅を地図上で確認し「俺ん家はセーフ」「うちはアウト」と騒ぎが始まります。私は「きみの家は本当にセーフ？明治三陸津波より大きな津波が来たら危ないかもしれないよ」「この学校も危ないかも」とハザードマップに示された想定をクリアにするのです。

—行政の防災はあくまで想定外力を想定したもの

相手は自然、その想定を超える事態も当然あり得る
 —しかし、今回の大震災では、「想定にとられすぎた」ため、犠牲になった人も多かった
 —ハザードマップに示されるような浸水想定区域は、あくまでも防災施設を建設する際の
 “想定外力”であって、それ以上の災害が起こる可能性があると思え
 (浸水想定区域外であったにもかかわらず、それにとられることなく避難を行った)



(今回の水色の部分が津波で浸水となった部分です。これが自然の想定です。)



「最善を尽くせ」

相手は自然です。「最善を尽くしても死ぬかもしれない。でもそれは仕方がない。なぜなら、それは最善であって、それ以上のことは君たちにはできないからだ」と話すのです。ときにどうにもならない自然災害に向かい合う姿勢を教えるのです。

大いなる自然の振る舞いの中でできることは、その状況下で最善を尽くすことだけ「ここまで来ればもう大丈夫だろう」ではなく、そのときできる最善の対応行動をとれ（状況から判断し、予め決めておいた避難所よりさらに高台の場所を目指した）

「率先避難者たれ」

逃げる姿勢だけではダメ。逃げるという行動を具体化させるために盛り込んだものです。

私は中学生に「君達は助けられる立場ではない。助ける立場だ」と言ってきました。その一方で「いざそのときになったら、自分の命を守りきることに専念しろ」「まず、君がいちばんに逃げろ」と語っています。子どもたちは躊躇します。そこでこう説明するのです。

「君が自分の命を守り抜くことが、周りの命を助けることになる」と。誰かが逃げれば、周囲の人間も行動しやすい。「君が逃げればみんな逃げ出す。君が率先避難者になってみんなを救うのだ」

一「正常化の偏見」を打ち破る

非常事態時、人は避難しないと決めているのではなく、避難するという意思決定ができないだけ

一いざというときには、まず自分が率先して避難すること。その姿を見て、他の人も避難するようになり、結果的に多くの人を救うことが可能となる（群集心理）

（避難する中学生を見て、3階に待機していた小学生は校外へ避難した。そして、大挙避難する子どもたちをみて、近所の大人たちもつられて避難した。）

・子どもたちへの防災教育……**姿勢の防災教育**

防災に対して主体的な姿勢を醸成する。

×「脅しの防災教育」…外圧的な形成される危機意識は長続きしない

×「知識の防災教育」…主体的な姿勢がないまま知識を与えることはかえって危険⇒想定にとらわれる

□釜石で取り組んできた津波防災教育

・子どもを中心とした防災教育……10年が経てば大人になる、さらに10年経てば親になる
高い防災意識や災いをやり過ごす知恵が世代間で継承される⇒地域に災害文化として根付く

・津波防災教育の家庭への浸透を図る

子どもの親世代は生活に追われ、防災講演会を開いてもなかなか参加してもらえない。

⇒子どもを介して親の関心を引き出す……親子で津波防災教育に取り組む

・「津波てんでんこ」の意味を再考する

表面的には「てんでばらばらに、家族のことさえ気にせず一人で避難せよ」

しかし、子どもの姿が見えなければ、その親は子ども探しに家に戻る。その間に津波の犠牲となってしまう。とてんでんでばらばらに逃げることはできない。

……家族がそれぞれで避難していることを信じ合えていれば、いざというとき、各人が避難することに専念できる

- ・子どもは親に必ず逃げているからと普段から言っている。
- ・お母さんも迎えに行かず逃げるからと必ず子どもに普段から伝えておく。
- ・避難がひと段落したら必ず迎えに行くからね。と子どもに必ず言う事。

—津波でんでんこの本質：自らの命に責任を持つこと、家族との信頼関係を築くこと。

- ・子ども津波ひなんの家～津波防災教育を地域に波及させる

—住民一人だけではなかなか避難しようとならないが、近所の子どもが駆け込んでくると、その子どもを預かることになる。

……いざというときは駆け込んできた子どもと一緒に避難せざるを得なくなる。すなわち、子どもの命を守ることで、自らの命も守ることにつながる。

- ・釜石に住むための“お作法”としての津波防災

自然の恵みに近づく＝自然の災いに近づく

災いをやり過ぎず知恵を持つことは、豊かな自然の中で生活するための条件

□これからの防災、如何にあるべきか……「人が死なない防災」

【なぜ、これだけ多くの犠牲者がでたのか】

- ◎身体的理由から避難することができなかった……高齢者、災害時要援護者等
- ◎状況的に避難することができなかった……消防、警察、役所、介護者（家族を含む）等
- ◎想定にしばられていたため、十分な避難をしなかった……「過去の津波では大丈夫だった」「ハザードマップの浸水想定区域外は安全」「避難所に行けば絶対に安全」「防潮堤があるから大丈夫」等

【これからの防災に求められること】

- ◎防災の一義的な目的は災害ごときで人を死なせないこと
帰宅困難者問題や避難生活・避難所運営に係る問題、復旧・復興に係る問題など、いわば「生き残った人のための防災」はその次。
- ◎東日本での悲劇を繰り返さないために
想定される地震・津波等、今後起こりうる巨大災害への備え
- ・人は忘却するもの。それを前提に、それでも3.11大津波の教訓が生きる文化の醸成が必要



連動する巨大地震

